

「サメの骨は、明日になったら取れるかな。」



石じゃダメだ！「スコップでやってみよう。」



「3人で引っ張るんだ！」



U児の発見した『サメの骨』に見立てた木の根



新たに発見した『サメの骨』を見る2人

# CASE 15 3歳児



## 「くん手伝ってくれ！」

協力園  
大分大学教育学部  
附属幼稚園

### （幼児の実態）

運動会が終わって、一人で遊ぶことが出来る積木では物足りなさを感じているように考えた保育者は、年中児の使用している長さ1メートル程の棒状のものと、板状のもの、Hの形をしている木製積木を準備しました。組み合わせると、立体的に組める積木です。最初は、それぞれが思いのままに積木を置いていたので、グループとして積木の上には乗れない状態だったようです。今は、『工事現場』という遊びの場で使われています。

1月中旬朝、保育者は子どもたちが遊びの区切りをつけて集まるのを待ち、「今は、時計の長い針が7と8の間だね。長い針がぐるーっと回ってまた、7になったら、お片付けだよ。それまでは、遊んでいいよ。」と話します。すると、R児が「工事現場早くしたくなっちゃう。」と、思わず出た言葉に、保育者も「したくなっちゃうね。」と、子どもに共感して言葉を返しました。

昨日のように6人は、棒状の積木を囲炉裏型にし、その上に隙間なく板状積木を敷き詰めようとしています。U児は板を運びながら、友達とすれ違い様に、「でっかい、お家になってるね。」と、言いますが反応はありません。板状積木を置く場所がなくならないのか？何でだよ。」と、呟きながら土の見えるスペースを埋め尽くすように、板状積木を置いていきました。最後の1枚を置くと、「みんな、できた！俺のゼロワン（仮面ライダー）のお家。」と、思わず大きな声が出ました。仲間のT児が、戻って来て「ゼロワンのお家？」と聞くと、U児は「そう、ゼロワンのお家。」と、言いながら、得意げに靴を脱いで上がりました。R児も戻って来ると、U児が靴を脱いでいるのを見て、自分も靴を脱ぎ「ただいまー。」と、お家のイメージで遊びます。S児も戻って来て「玄関、どこ？」と聞きます。少し前に戻って来たR児が「ここよ。」と、靴を指差して教えました。

U児は、S児とゼロワンになって遊び始めます。S児が「悪者がいたぞ！早く来てくれ。」と言うと、U児は「ブ、ブー。」と電話の着信音を表現し、携帯電話に見立てた石を耳に当て、「はい、また悪者かい。僕は、バイクで行く！」と、U児とS児は、なりきって出かけました。見えない悪者と戦って、ゼロワンのお家に戻ってきたU児は「サメの骨を発見。土の中で発見した。触ってみて。」と、S児に伝え、S児のいる所へ『サメの骨』を持って行きました。その時、2人の足下の土に埋まっている木の根っこがありました。S児は「見て！（サメの骨）」と、宝物を発見したような驚きの表情でU児を見ると、顔を見合わせ、木の根っこをじっと見ています。

U児とS児の様子を見ていたK児が「3人で引っ張るんだ！」と言うと、U児は「K君、骨を放さないでよ！」まるで、『おおきなかぶ』を引き抜くように力を合わせましたが、抜けません。U児は「T君手伝ってくれ！」と、近くにいたT児に声を掛けて手伝ってもらいます。4人でも、抜けません。S児が（携帯電話にしていた）平らな石を使って掘り始めると、K児も同じような石を探ってきて一緒に掘り始めますが、うまく掘れません。

するとK児が、スコップを持ってきて掘り出します。2人の様子を見ていたU児、石で掘ることを考えたS児、周りで見ていたT児、R児の4人は次々にスコップを持ってきて、K児と一緒に掘り始めました。掘った土は、『サメのフン』として、ゼロワンの家の床下に入れるようになりしました。土を掘っては床下に入れることを何度も繰り返しながら、S児が「サメの骨は、明日になったら取れるかな。」と、呟きました。T度、保育者がやって来て、S児の呟きをキャッチして、「明日、取れるといいね。」と、みんなに話しました。

『自分が遊ぶことを楽しむ』から、『イメージを共有しながら遊ぶ』過程には、自分を受け入れてくれる人との温かい関係が必要だと考えます。その中で、子どもたちは、友達に思いを言葉で伝えながら、思考したり、試したりし、協力していくようになっていくと感じました。

### 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿 「10の姿」



友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

### 事例から見られる10の育ち 社会生活との関わり

子どもは、初めての園での集団生活を通して、保育者との信頼関係を基盤とし、友達と親しみをもって関わるようになる。子どもの気持ちに寄り添って肯定的に関わる保育者の姿をモデルに、子どもは、周りの状況を感じ取り、同じイメージで遊ぶようになっていく。これは、相手の気持ちを考えて関わったり、イメージを受け入れたりしながら、一緒に遊ぼうとする姿と考える。一緒に活動することを楽しむ経験を通り返すと、仲間の一員としての関わりができるようになる。

5歳児になると、好奇心や探究心がより高まり、詳しく知りたい、本物らしくしたい等、自分たちに必要な情報を取り入れようとして、園の外の人との関わりを求めていく。それが、いろいろな人と関わることを楽しんだり、相手に応じた関わり方をしたりする姿につながる。

### 事例から見られる10の育ち 協同性

U児の楽しみ方がS児へと広がり、2人の姿が、周りの子どもたちを巻き込みながら広まっていった。また、お話の世界で『サメの骨』（木の根っこ）を抜こうとしたり、身近な素材で試したりしたが引き抜けない。みんなが使ったことのあるスコップを使い始めたことで、どうしても掘り出したいという思いが、周りの友達に伝わって、同じ思いになっていったと考える。明日に期待をしながら遊ぶ姿は、自立心にも繋がっていくと思われる。

### 協同性 環境構成のポイント

- 子どものやってみたいことに共感しながら関わる保育者。
- 子どもがやってみたいことに十分取り組める、ゆっくりとした時間の確保と、違う遊びをしても戻れる場所。
- 子どもが自分の思いを十分にらせるクラスの雰囲気（保育者や友達関係）や、自分の思いを言葉で表現する力。
- 一人では組み立てられない遊具（棒の積木）や、子どもが共通理解しやすいような言葉や道具（工事現場、サメの骨、スコップ）等、友達とイメージを共有できる言葉や遊具。
- 友達のイメージや気持ちを察知して行動する仲間。